

1/7/1

DIALOG(R)File 352:DERWENT WPI

(c)1997 Derwent Info Ltd. All rts. reserv.

004718599 WPI Acc No: 86-221941/34

XRAM Acc No: C86-095620

New antiarteriosclerosis drug based on human apo A1 phospholipid complex

Patent Assignee: (DAUC) DAIICHI SEIYAKU KK

Number of Patents: 002

Number of Countries: 001

Patent Family:

CC Number	Kind	Date	Week	
JP 61152632	A	860711	8634	(Basic)
JP 93037409	B	930603	9325	

Priority Data (CC No Date): JP 84278140 (841226)

Applications (CC,No,Date): JP 84278140 (841226)

Filing Details: JP93037409 Based on JP61152632

Abstract (Basic): JP 61152632

New antiarteriosclerosis drug contains a human apo A - 1 phospholipid complex.

The phospholipid is pref. dipalmitoyl phosphatidyl choline and/or sphingomyelin. The complex uses human apo A - 1 and lipid, and can be prepd. according to normal methods for ribosomes, e.g., cholic acid dialysis, ultrasonic method, ethanol injection method, triton X - 100 batch method, etc.

The apo A - 1 used to make the human apo A - 1. phospholipid complex can be prepd. by such methods as ultracentrifugal fractionation from serum, ion exchange chromatography using DEAE-cellulose, gel filtration, etc.

USE/ADVANTAGE - The effect of this invention showed (1) removing action of cholesterol from the inside of culture blood vessel smooth muscle cells, and (2) quantitative and temporal distribution of HDL fractions of serum, (3) an improving effect on arteriosclerosis, and (4) safety. @(6pp Dwg.No.0/0)@

Derwent Class: B04;

Int Pat Class: A61K-037/02; A61K-037/04; A61K-037/22

⑫ 公開特許公報(A)

昭61-152632

⑬ Int.Cl.⁴

A 61 K 37/04

識別記号

A B X

庁内整理番号

7138-4C

⑭ 公開 昭和61年(1986)7月11日

審査請求 未請求 発明の数 1 (全6頁)

⑮ 発明の名称 抗動脈硬化剤

⑯ 特 願 昭59-278140

⑰ 出 願 昭59(1984)12月26日

⑱ 発 明 者 富 川 宗 博 東京都江戸川区北葛西1丁目16番13号 第一製薬中央研究所内
⑱ 発 明 者 若 杉 潤 一 郎 東京都江戸川区北葛西1丁目16番13号 第一製薬中央研究所内
⑱ 発 明 者 石 原 正 直 東京都江戸川区北葛西1丁目16番13号 第一製薬中央研究所内
⑱ 発 明 者 菊 池 寛 東京都江戸川区北葛西1丁目16番13号 第一製薬中央研究所内
⑲ 出 願 人 第一製薬株式会社 東京都中央区日本橋3丁目14番10号

明 細 書

1. 発明の名称

抗動脈硬化剤

2. 特許請求の範囲

1) ヒトアポA-I・リン脂質複合体を含有する抗動脈硬化剤。

2) リン脂質がジベルミトイルホスファチジルコリンおよび/またはスフィンゴミエリンである特許請求の範囲第1項記載の抗動脈硬化剤。

3. 発明の詳細な説明

<産業上の利用分野>

本発明は新規な抗動脈硬化剤に関するものである。更に詳しくは、本発明はヒトアポA-I・リン脂質複合体を有効成分として含有する新規な抗動脈硬化剤に関するものである。

<従来技術>

現在、各種血管病変の主要起因疾患とされる動脈硬化症(以下、動脈硬化症と記す)の主要原因の一つとして、血管壁への脂質、特にコレステロールエステルの蓄積が挙げられている。一方、

脂質代謝に様々な役割を果しているとされる血液リポ蛋白に関する研究が進展し、その一種である高密度リポ蛋白(以下、HDLと記す)については、動脈硬化症との関連で、HDLの持つ機能、特に血管壁からの遊離コレステロールの除去作用が注目されている。

一方、HDLの構成成分については、アポA-I以外にアポA-IIおよびその他のアポリポ蛋白成分並びに各種のリン脂質およびコレステロールが知られている。又、HDLはHDL₂およびHDL₃等に小分類することも可能である。

しかしながら、コレステロールの除去作用と動脈硬化症の改訂については密接に結びついているわけではない。又、上記のHDLの各成分が動脈硬化症の改訂に結びつくかどうか疫学的手法により種々解析が検討されつつあるが本疾患の多要因性のため解析が困難であり、未だ確定されるにいたっていない。

<発明が解決しようとする問題点>

本発明者は動脈硬化症の予防および治療効果

を有する物質の探索について鋭意検討した結果、
ヒトアポA-I・リン脂質複合体が上記目的にかなうことを見出し本発明を完成した。

<発明の構成>

本発明はヒトアポA-I・リン脂質複合体を有効成分とする抗動脈硬化剤に関する。

リン脂質としてはフォスファチジルコリン、フォスファチジルエタノールアミン、フォスファチジルセリン、フォスファチジルイノシトール、スフィンゴミエリン(以下、BSP)等があげられるが、ジベルミトイルフォスファチジルコリン(以下、DPPC)等のフォスファチジルコリン、スフィンゴミエリンが好ましい。これらは、単独で使用してもよいが、2種類以上を併用してもよい。本発明にかかわる複合体におけるアポA-Iとリン脂質の組成比は特に制限はないが、リン脂質としてDPPC、BSPまたはDPPCとBSPを併用した場合には調製した複合体の品質から通常モル比で1:150~180、好ましくは1:160前後である。

・リン脂質複合体を製するに使用するアポA-Iは一般的方法、例えば、血清から超遠心分離法、セファクリルS-300等によるゲル濾過法およびDEAE-セルロース等によるイオン交換クロマトグラフィー法などを組合わせて分離、精製することにより調製し得る。

<発明の効果>

本発明の効果は①培養血管平滑筋細胞内からのコレステロール除去作用、②生体投与時における血清のHDL分画への目的および時間的分布状態、③動脈硬化症に対する改変効果および④安全性試験により確認した。

更に詳細に述べれば①の効果は

・ヒト動脈またはウサギ胸部大動脈の外相体から培養したヒトまたはウサギ血管平滑筋細胞を用い、これ等に³H-コレステロールを取り込ませた培養細胞系を使用する試験方法等により確認した。

②の効果は

生体に及ぼす抗原抗体反応の影響を考慮して、

本発明にかかわる複合体はヒトアポA-Iとリン脂質とを併用して、一般的ナリボソーム調製方法例えばコール酸透析法、超音波法、エタノール注入法、トリトンX-100パッチ法等により調製し得る。

このようにして調製した複合体は、ゲル濾過法により1ピークを示すことおよび電子顕微鏡観察により微小かつ均一の円板上粒子が連続したいわゆる β -ロー状粒子が殆どを占めていることから本発明にかかわるヒトアポA-I・リン脂質複合体が単なる混合物ではなく複合体を形成していること又、該複合体が均一性に役れていることを確認した。また、かかる複合体の形態は肝臓で生成された未成熟のHDLと類似していることから両者の構造上の類似性が想定され、複合体を生体に投与した際、最も効果のある形態と考えられる。このようにして調製した複合体は安定な物質であり、例えば5℃以下の冷所に長期間安定に保存し得る。

なお、本発明の対症物質であるヒトアポA-I

例えば¹²⁵Iで標識したウサギアポA-Iから調製した¹²⁵I-ウサギアポA-I・DPPC・BSP複合体をウサギに投与し、血清中のリポ蛋白質分画の放射活性を測定する等の方法により確認し得た。
③の効果は

高コレステロール食、例えばコレステロールおよびラードを添加した飼料等で飼育して大動脈などの血管壁にコレステロールを蓄積させたウサギの動脈硬化症モデルを作成する。次いでこのウサギ動脈硬化症モデルの胸部大動脈を摘出し、その病変部位、即ちアテローム部位および脂肪沈着部位の外相体の培養系を使用する試験方法等により確認し得た。

更に、この改変効果は、前記の高コレステロール食を飼育して作成したウサギ動脈硬化症モデルに前記ウサギアポA-I・リン脂質複合体、例えばウサギアポA-I・DPPC・BSP複合体等を投与し、大動脈および冠状動脈の病変部位について生化学的および病理学的検討を行なう方法により確認し得た。

④の効果、即ち、

アポA-I・DPPC・BSP複合体が極めて低毒性であることは、例えばウサギアポA-I・DPPC・BSP複合体のウサギに対する急性毒性試験(腹腔内投与)を行なった結果、LD₅₀値は0.5g/kg以上であることなどから判断した。

尚、ウサギアポA-I・リン脂質複合体はヒトアポA-I・リン脂質複合体と、物理化学的性質、例えば分子量、アポ蛋白とリン脂質の組成比、形態及びコレステロール除去効果等において同等であることをゲル濾過、電泳法並びに前記④の効果等により確認した。

本発明のヒトアポA-I・リン脂質複合体の投与口としては例えば長寿症候群の血中アポA-Iレベルを維持する口、即ち正常人の血中アポA-Iレベルの2倍以上を維持する口を挙げ得る。更に、詳しくはヒトアポA-I・リン脂質複合体の好ましい投与口及び投与方法としては、例えばアポA-I口に換算して、1回1.5g~3.5g/人づつ週2回、1ヶ月間またはそれ以上連続して投

温度(以下、^{T_c}DPPCのT_c:41℃、BSPのT_c:32℃、DPPC及びBSPの混合物のT_c:41℃)に10分間保つ。

次にヒトまたはウサギアポA-Iの前記緩溶液4.6ml(アポA-I口として802.0μ(リン脂質1.60モルに対してアポA-Iが1モルの割合))を加え、T_cで72時間インキュベートしてヒトまたはウサギアポA-I・リン脂質複合体を回収した。回収した複合体は更に生理的食塩水に対して4℃で72時間透析を行いコール酸ナトリウムを除去した。このようにして回収したヒト或いはウサギアポA-I・リン脂質複合体についてセファロースCL-6B(2.3×52cm)のカラムにより前記緩溶液でゲル濾過を行い、各溶出画分の蛋白口及びリン脂質口を測定した。その結果、ヒトアポA-I・リン脂質複合体及びウサギアポA-I・リン脂質複体のいずれにおいてもリン脂質及びアポ蛋白のピークが同一のフラクションに見られた。又、両複体の分子量は約82万であり、アポA-Iとリン脂質との組成比

脈内投与する方法を挙げ得る。

本発明のヒトアポA-I・リン脂質複体の製剤型としては、各画の製剤上及び生理学的に許容し得る剤型、例えば注射剤等を挙げ得る。

<実施例>

以下、本発明について実施例及び試験例を挙げて説明する。

実施例1(ヒトアポA-I・リン脂質複合体及びウサギアポA-I・リン脂質複体の調製)

リン脂質は、DPPC単独、またはBSP単独、またはDPPCとBSPの等モル混合物の3つの組成を用いた。2510μのリン脂質を10mlのクロロホルムに溶解した後に、窒素気流下で薄膜状に乾固させクロロホルムを完全に除く。次に緩溶液(10mM トリス-塩酸、1mM エチレンジアミン四酢酸、1mM アジ化ナトリウム、150mM 塩化ナトリウム、pH 8.0)を10ml加え、70℃に加温して混はんする。次に8020μのコール酸ナトリウム(リン脂質1モルに対してコール酸ナトリウム2モルの割合)を加え、相移

(モル比)は平均1:165であった。又、ヒト或はウサギアポA-I・リン脂質複合体について電子顕微鏡像より大きさを測定した。その結果、いずれの複合体もほぼ均一な直径200~300Å、厚さ50Åの円板状物質が球状につながった、いわゆるルーローを形成していることを認めた。試験例1(ヒトアポA-I・リン脂質複合体及びウサギアポA-I・リン脂質複体のヒト及びウサギ培養平滑筋細胞からのコレステロール除去作用)

ヒトの心筋またはウサギの胸大筋の外植体から、10%胎児牛血清(FCS)と抗生物質を含有するダルベッコ改良イーブル(DMEM)培養液を用いて、平滑筋細胞を生育させた。細胞は5%二酸化炭素と95%空気の気相中、37℃で培養した。2週間培養した後にトリプシン処理を行い、二次培養を行った。このようにして作成したヒト或いはウサギの平滑筋細胞を⁷フォルコン8047皿(培養面積2.0cm²/ウェル)に80000個/皿の細胞密度で5%FCSと抗生物質を含む

1 ml の DMEM 培養液中で培養した。15 時間培養し、細胞が皿に付着した後に、培養液を 5% FCS、抗生物質と ^3H -コレステロール ($0.25 \mu\text{Ci}/\text{ml}$) を含む 1 ml の DMEM 培養液に交換して、さらに 8 時間培養を行い、 ^3H -コレステロールを細胞内に取り込ませた。8 時間培養後に前記の ^3H -コレステロールを含む培養液を除き、DMEM 培養液で 3 回洗浄した。その後に被験群として、実験例 1 に準じて調製し、DMEM 培養液で透析を行ったヒトまたはウサギアボ A-I・リン脂質複合体の DMEM 培養液 (培養液 1 ml 当たりアボ A-I 口として 5~100 μg 含む) 1 ml を被験培養液として加え、8 時間培養を行った後に、培養液及び細胞中の ^3H -コレステロールの放射活性を測定した。対照群は DMEM 培養液で培養を行い、被験群及び対照群とも各群 6 枚の皿で実験を行った。コレステロール除去作用 (コレステロール除去率) は次式で表わした。

コレステロール除去率 (%)

$$= \frac{\text{培養液中の } ^3\text{H}-\text{コレステロール RA}}{\text{培養液中の } ^3\text{H}-\text{コレステロール RA} + \text{細胞中の } ^3\text{H}-\text{コレステロール RA}} \times 100$$

(上記式中 RA は放射活性を意味する。)

ヒトまたはウサギアボ A-I・リン脂質複合体のヒト培養血管平滑筋細胞に対するコレステロール除去作用を表 1 に示した。ヒトアボ A-I・DPPC・BSP 複合体、ヒトアボ A-I・DPPC 複合体及びヒトアボ A-I・BSP 複合体はヒト培養血管平滑筋細胞に対して強いコレステロール除去作用を示し、ウサギアボ A-I・DPPC・BSP 複合体もヒト培養血管平滑筋細胞に対してコレステロール除去作用を示した。

表 1

	アボ A-I 口 ($\mu\text{g}/\text{ml}$)	コレステロール除去率 (%)
対 照	0	18.3 \pm 3.5 \pm
ヒトアボ A-I・ DPPC・BSP 複合体	100	63.8 \pm 1.6 1
	50	62.5 \pm 0.9 1
	5	58.2 \pm 3.6 3
ヒトアボ A-I・ DPPC 複合体	100	64.8 \pm 1.6 3
	50	59.1 \pm 2.7 1
	5	55.9 \pm 3.1 2
ヒトアボ A-I・ BSP 複合体	100	64.6 \pm 0.5 2
	50	61.8 \pm 1.6 2
	5	50.2 \pm 3.8 2
ウサギアボ A-I・ DPPC・BSP 複合体	100	61.9 \pm 1.7 6
	50	59.3 \pm 2.3 2
	5	54.3 \pm 5.5 6

ヒトアボ A-I・リン脂質複合体及びウサギアボ A-I・リン脂質複体のウサギ培養血管平滑筋細胞に対するコレステロール除去作用を表 2 に示した。ウサギアボ A-I・DPPC・BSP 複

合体はウサギ培養血管平滑筋細胞に対して強いコレステロール除去作用を示した。また、ヒトアボ A-I・DPPC・BSP 複合体及びヒトアボ A-I・DPPC 複合体も共にウサギ培養血管平滑筋細胞に対して強いコレステロール除去作用を示し、その作用の強さはウサギアボ A-I・DPPC・BSP 複合体と同程度であった。

表 2

	アボ A-I 口 ($\mu\text{g}/\text{ml}$)	コレステロール除去率 (%)
対 照	0	18.0 \pm 0.5 0
ヒトアボ A-I・ DPPC・BSP 複合体	100	87.2 \pm 1.5 3
	20	78.1 \pm 2.7 1
ヒトアボ A-I・ DPPC 複合体	100	88.1 \pm 2.0 5
	20	67.1 \pm 0.7 5
ウサギアボ A-I・ DPPC・BSP 複合体	100	80.3 \pm 0.8 2
	20	68.8 \pm 0.8 0

実験例 2 (ウサギアボ A-I・リン脂質複合体投与後の血中リポ蛋白質成分への分布)

1- 塩化ヨウ素法によりラベルした ^{125}I -ウサ

アボ A-I を用いて、実施例 1 に準じて ^{125}I -ウサギアボ A-I・DPPC・BSP 複合体を調製した。正常ウサギに 1 ml の ^{125}I -ウサギアボ A-I・DPPC・BSP 複合体の生理的食塩水 (アボ A-I 量として 100 $\mu\text{g}/\text{ml}$, 放射活性: $2 \times 10^6 \text{ cpm}/\text{ml}$) を耳動脈より静注し、投与 3 3 時間後の血清を超速心法により超低比重リポ蛋白 (VLDL), 低比重リポ蛋白 (LDL), HDL 及び超高比重リポ蛋白 (VHDL) を分離し、各リポ蛋白画分の ^{125}I の放射活性を測定した。表 3 に示す様に、 ^{125}I -ウサギアボ A-I・DPPC・BSP 複合体は投与 3 3 時間後にはほとんど HDL 画分に存在していた。

表 3

	投与 3 3 時間後の血清中の ^{125}I -アボ A-I の放射活性の割合 (%)
VLDL ($d < 1.006$)	0.3
LDL ($1.006 < d < 1.063$)	5.7
HDL ($1.063 < d < 1.21$)	82.3
VHDL ($1.21 < d$)	11.2

液を交換して 10 日間、 37°C 、5% 二酸化炭素、95% 空気の気相中で培養した。全外植体及び培養液のコレステロールはイソプロピルアルコール-n-ヘキサン (2:3) で抽出し、高速液体クロマトグラフィーで測定した。コレステロール除去作用 (コレステロール除去率) は次式で表わした。

コレステロール除去率 (%)

$$= \frac{\text{培養液のコレステロール量}}{\text{外植体のコレステロール量} + \text{培養液のコレステロール量}} \times 100$$

表 4 に示す様に、ウサギアボ A-I・DPPC・BSP 複合体は対照の約 4~7 倍のコレステロール除去率を示し、その作用は脂肪沈着部位においてとくに明瞭であった。

表 4

	コレステロール除去率 (%)	
	アテローム部位	脂肪沈着部位
対 照	7.68	6.17
ウサギアボ A-I・ DPPC・BSP 複合体	27.20	48.61

試験例 3 (ウサギアボ A-I・リン脂質複合体の動脈硬化症ウサギの大動脈から調製した外植体に対するコレステロール除去作用)

ニュージーランドホワイトの雄性ウサギを 0.5% コレステロール及び 5% ラードを添加した飼料で 10 週間飼育後、正常食でさらに 8 週間飼育し大動脈にコレステロールが蓄積した動脈硬化症ウサギを作成した。この動脈硬化症ウサギの胸大動脈を無菌的に取り出し、脂肪を取り除き、外膜をつけたままアテローム部位と脂肪沈着部位を分離した。それぞれの部位を $1 \times 2 \text{ cm}$ の切片に切り、外植体として使用した。被験培養液としては、5% FCS と抗生物質を含む DMEM 培養液に、実施例 1 に準じて調製したウサギアボ A-I・DPPC・BSP 複合体 (アボ A-I 量として 200 $\mu\text{g}/\text{ml}$) を加えたものを使用し、対照は 5% FCS と抗生物質を含む DMEM 培養液を使用した。外植体 20 個を 2 ml の培養液を加えた 50 ml の培養フラスコ (ファルコン 3013 (ベクトン, ジェンソン社製)) 中、3 日、6 日及び 8 日後の計 3 回培養

試験例 4 (ウサギアボ A-I・DPPC・BSP 複合体の動脈硬化症ウサギへの投与による動脈硬化改善効果)

ニュージーランドホワイトの雄性ウサギを 0.5% コレステロール及び 5% ラードを含む飼料で 10 週間飼育後、さらに正常食で 5 週間飼育し、血管壁にコレステロールが蓄積した動脈硬化症ウサギを 33 匹作成した。この動脈硬化症ウサギの中より、血清コレステロール値、虹彩の脂肪沈着の同程度のものを 8 匹選抜して実験に使用した。被験群には実施例 1 に従って調製し、0.5 μg のフィルターを通して無菌にしたウサギアボ A-I・DPPC・BSP 複合体の生理的食塩水 (1 ml あたりアボ A-I 量として、10 μg を含む) を 2 匹のウサギに、4 ml/匹の割合で、2 日おきに 4 週間、計 10 回、耳動脈より静注した。対照群には生理的食塩水を 4 ml/匹の割合で 8 匹のウサギに静注した。

屠殺時の血清のアボ A-I 及び高比重リポ蛋白コレステロール (HDL-コレステロール) を

測定して表5に示した。このウサギアポA-I・DPPC・BSP複合体を前記の動脈硬化症ウサギに投与することにより、血清のアポA-IとHDL-コレステロール量が増加し、血清コレステロールの改善効果を示した。また屠殺後摘出した大動脈のコレステロール量とその組成を高速液体クロマトグラフィーにより測定し表6に示した。このウサギアポA-I・DPPC・BSP複合体を前記の動脈硬化症ウサギに投与することにより血管壁のコレステロール量は減少し、また血管壁のコレステロール組成においてもオレイン酸コレステロールの割合が減少し、遊離コレステロールの割合が増加しており、血管壁での動脈硬化の改善効果が示された。

表5

	アポA-I量 (mg/dl)	HDL-コレステロール量 (mg/dl)
対 照	85.6	16.2
ウサギアポA-I DPPC・BSP複合体	197.6	45.2

冠状動脈)と分枝細小動脈に分けて血管の狭窄の発生頻度(狭窄血管数/全血管数×100)を測定した。その結果は表8に示す通り、ウサギアポA-I・リン脂質複合体の投与により、冠状動脈幹、分枝細小動脈ともに狭窄頻度の軽減化が見られ、冠状動脈に対しても動脈硬化の改善効果が認められた。

表8

	狭窄の発生頻度(%)	
	冠状動脈幹	分枝細小動脈
対 照	19.0	14.8
アポA-I DPPC・BSP複合体	8.3	9.6

表6

	コレステロール量 (mg/g)	コレステロール組成(%)	
		オレイン酸 コレステロール	遊離 コレステロール
対 照	26.0	45.8	36.4
ウサギアポA-I DPPC・BSP複合体	18.7	39.9	43.0

更に、大動脈についてアテローム性病変及び脂肪沈着病変を病変部位として、大動脈中の病変部位の占める割合を固定標本装置により測定し表7に示した。ウサギアポA-I・リン脂質複合体を投与したウサギ大動脈の病変部の割合は対照と比べて減少しており、血管壁での動脈硬化の改善効果が示された。

表7

	大動脈の病変部の割合(%)
対 照	81.4
アポA-I DPPC・BSP複合体	49.2

屠殺時摘出した心臓について冠動脈切片を作成し、冠状動脈幹(左冠状動脈回廊枝、前下行枝及び右